慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	人種・エスニック関係研究とコンティンジェンシー・アプローチ：マルチカルチュラル・オーストラリア研究序説
Sub Title	Racial and ethnic studies and contingency approach : an introduction to multicultural Australia studies
Author	関根, 政美(Sekine, Masami)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1987
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.60, No.1 (1987. 1) ,p.223- 267
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	石川忠雄教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19870128-0223

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

人種・エスニック関係研究とコンティンジェンシー・アプローチ

——マルチカルチュラル・オーストラリア研究序説——

関根政美

はじめに——本稿の目的
一　人種・エスニック関係研究のアプローチ
(一)　同化主義アプローチ
(二)　原初的特性重視アプローチ
(三)　文化的分業（国内植民地）アプローチ
(四)　エスニック集団競合アプローチ
二　コンティンジェンシー・アプローチの可能性
(一)　アプローチの相補的対抗性
(二)　マルチカルチュラル・オーストラリア研究への示唆

はじめに——本稿の目的

本稿の目的は、近年、発達しつつある「人種・エスニック関係研究（racial and ethnic relations studies）」の動向に注目し、そこにみられる特質や論点をまとめ、筆者なりの研究視点なりアプローチを明らかにし、さらに、複合人種・エスニック社会化している「マルチカルチュラル・オーストラリア（多元文化社会オーストラリア：multicultural Australia）」研究に対する示唆を得ることにある。(1)

ところで、「人種・エスニック関係研究」であるが、その源泉は一九世紀の社会進化主義に基づく人種差別の理論にある。しかし、二〇世紀前半のシカゴ学派の成立以後、イデオロギー的には反人種差別的なものに変化するとともに偽似科学的なものから科学的な研究へと進展してきている。しかし、人種・エスニック集団関係研究として急激な発展をみたのは一九七〇年代であり、六〇年代、七〇年代の世界的な人種・エスニック問題の発生を契機としている。この時期に、単なる偏見、ステレオタイプそして差別の社会心理学的な研究からの脱皮が計られるとともに、多様なアプローチが展開しインターディシプリナリーなものへと変容していった。とくに、先進諸国——そこでは人種・エスニック問題は基本的に卒業したものと考えられ、偏見と差別は一部の逸脱者の行為とみなされていた——における人種・エスニック問題の発生と持続は大きな衝撃を与え、人種・エスニック関係研究の発達を促した（van den Berghe, 1979：23）。今、試みに近年発達している主なアプローチを列挙してみると左のようになるだろう。

(一) 同化主義アプローチ
(二) 原初的特性重視アプローチ
(三) 文化的分業あるいは国内植民地アプローチ
(四) エスニック集団競合アプローチ

以下において、各々のアプローチについて簡単な考察を加えながら、今日の人種・エスニック関係研究の発展の特質についてまとめるとともに、今後のオーストラリア社会研究のための示唆を得たいと思うが、その際に、人種・エスニック関係研究への条件適応、すなわちコンティンジェンシー・アプローチ (contingency approach) の有効性についても検討を加えたい。

一　人種・エスニック関係研究のアプローチ

(一) 同化主義アプローチ

「同化主義アプローチ (assimilationist approach)」は、人種・エスニック関係研究においては「拡散・消滅型 (diffusion-eraser model) アプローチ」(Nielsen, 1985) あるいは「単線的理論 (straight-line theory) アプローチ」(Sandberg, 1974)、「発展的理論 (developmental ethnicity perspective)」(Leifer, 1981) ともよばれる。これらは、生得的特色たとえば肌の色とか顔形など人種的な指標、あるいは、言語、宗教、生活習慣のような文化的指標を利用して、人々を集合的に差別するだけでなく、生得的能力の差や社会における地位の差を説明し差別を正当化することは、社会の合理化、近代化とともに消滅していくと考えるものである。人種的あるいは文化的指標でもって人間集団を区別し、そこに特定の社会関係の存在がみられる時、そこに人種・エスニック関係（偏見、差別や紛争を含む）が生じているとみなすわけだが、ともかくもこれらは消滅し人々は同化可能であると考えるものである。

このアプローチは、社会の近代化と工業化の中で、人々の価値や行動への動機づけの志向が変化して、いわゆる属性主義 (ascription)、特殊主義 (particularism) あるいは地域主義、部族主義、伝統主義 (localism, tribalism, traditionalism) への志向から普遍主義 (universalism) や業績主義 (achievement) へと志向が移行していく点を指摘した産業社会論（インダストリアリズム論）および社会・政治近代化論に基礎づけられている。[2] ところで、就職や結婚などにおいて人種・

エスニック的要素や身分、家柄といった属性的要素が重視される伝統社会ないしは前近代社会から、工業化にともないマス・メディアや交通機関の発達が促進され、情報と人々の移動が活発化し、機能的合理性とアーバニズムを中心とする都市・産業社会が発達することによって、人々は合理的、機能的思考態度や都市的生活様式を身につけ、その結果として業績主義と機会均等（equality of opportunity）主義、平等主義と反差別主義を欲する「リベラルな期待（liberal expectancy）」を身につけるものと産業社会論や近代化論は期待している（Gordon, 1975＝1984：118-9）。すなわち、工業化や近代化は人々の価値・規範を一定の方向に収斂させるとともに、人々のもつ属性主義を薄め、その結果、人々は同化しやすくなるとしているのである。これを土台としているのが同化主義アプローチである。(3)

ところで、近代化論は以上のような文化的あるいは経済―社会面での近代化に加えて、当然のことながら地方分権主義的な政治的単位をより中央集権的な国民国家（nation-state）へと統合が可能であるとする。すなわち、地方分権主義的な政治的、経済的そして文化的単位が自律性を失うことによって同質的な文化やナショナリズムによって裏打ちされたより大きな統合社会を生み出すのである。こうして国民国家にとり込まれた人々は、移民や難民であれ周辺の少数民族であれ強力な国民文化の中に吸収され同化されてしまい、偏挟な部属主義や地域的エスノセントリズムは稀薄化していくことになる。近代化と工業化を進める社会は産業文明を中核とする新しい文化を基礎とした社会へと収斂していくというのが近代化論、産業社会論の基本的主題であるが、この論理は、一国民社会レベルを超えて国際社会レベルにも応用されて地球大の等質的コミュニティの形成を予見するまでにいたる（石川、一九八三：二五二―七）。こうした社会変動や文化変容の圧力の中でも同化が進まず、人種・エスニック的差異に基づく紛争や差別と偏見が生ずるのは、近代化過程そのものが十分進展しておらず、個々人の態度や心理において近代化、合理化が不十分だからであるということになる。

とくに注目すべきことは、偏見と差別や紛争の存在を、特定のタイプのパーソナリティをもつか、あるいは特定の

心理状態に陥りやすい人々の存在と関連させて解釈する傾向が同化主義アプローチには強いということである。たとえば、偏見と差別は欲求不満—攻撃型タイプの心理状態に陥りやすい人々や特に強い権威主義パーソナリティをもつ逸脱的な人々に特有のものとする傾向がある。つまり、同化主義アプローチに立つと、同化できぬ人々や偏見と差別をもつ人々もともに非合理的なパーソナリティの所有者として扱われることになる（Marger, 1985: 57-59）。それ故に、構造的要因を無視はしていないとしても、同化主義アプローチが、エスニシティを残存現象（residual phenomenon）とみなすとともに、それを社会心理学的視点から主に解釈しようとしていたことが明らかである。エスニシティそのもの、あるいはそれへのこだわりは非合理的なものとされたのである（Leifer, 1981: 24-25; Nielsen, 1980: 78）。

ところで、同化主義アプローチには、人々は自分達のもつ個有の文化や価値・規範あるいは生活習慣、言語など自由に取捨選択することができるという仮定が存在することに注目したい。むろん、それは服を着替えるように簡単にいくわけではないが、特定の過程を経ながら変化しうると考えるのである。D・L・ホロビッツは次のようにいう。

> ……集団境界は流動的な場合が多い。だが、種属関係の多くの研究は、まるで種族集団がすべてずっと昔から現在の形のままで存在してきたかのように、現在認められるままに人種集団を考える傾向があった。
>
> 境界の流動性が非常に新しい「事態の展開」なのだ、と私は言っているのではない。すなわち、それは新しいことではないのである。問題なのはむしろ、境界の変化の度合と重要性が、一般には、過小評価されてきたことなのである。……たとえば、集団が相互の境界を消す条件についての体系的な理解をもたずに、種属対立にたいする同化主義的な解決への展望——かつて流行した民族形成といったことばに含意された種類の——を、いったい誰がどのように評価できるのだろう（Horowitz, 1975＝1984: 151-2）。[4]

ホロビッツのいう集団相互の境界が消えていく条件について、体系的な考察をした代表的人物は都市社会学で有名なR・E・パークと長年にわたり人種問題を研究してきたM・M・ゴードンであり、各々は「人種関係循還モデル（race reltaions cycle model）」および「同化の段階モデル（stages of assimilations model）」を展開している（Marger, 1985:

74-76)。以下簡単にそれらについてみてみよう。

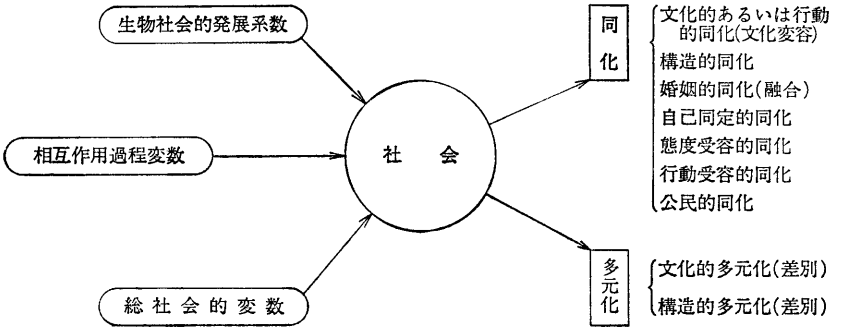
パークのモデルは以下のようになっている。人種・エスニック関係の発生は、国内および国外移住によって異質な人々が接触（contact）することによって生まれ、そこに文化的、価値的な競合（competition）や衝突が生じる。二つの異質文化の相互作用の中で、結局は移民がホスト社会の文化に対して応化（accomodation）し、言語や文化、価値を取り入れはじめることになるが、これは最終的には自分達のもっていた言語や文化・規範を捨てさり、ホスト社会のものを完全に受容していくという同化（assimilation）の段階に達するというものである。パークは、これらの過程をシカゴに集まる多くの移民（主にヨーロッパ系）と、そのシカゴに代表されるような都市文明との相互作用の中で観察することができたわけだが、彼はヨーロッパ系移民の同化状況をみて、これを不可逆的で継続的（irreversible and progressive）なものとみた。つまり、近代化、工業、都市化を進めるアメリカ文明の中の必然的過程とみるとともにアメリカ化（Americanization）としたのであった。

ところで、ゴードンのモデルであるが、これはパークのモデルを土台としているとはいえ、生物的同化（biological assimilation）を含めた物心両面を問題としているために議論は多少とも複雑である。彼の場合、異質な人々が接触した時にまず文化レベルでの同化が生じるとする。これを「文化ないしは行動的同化(cultural and behavioral assimilation)」あるいは「文化変容（acculturation)」の段階とよぶ。これは、ともかくも移民がホスト社会の文化、言語を理解しマスターしようとする段階である。次に生まれるのが「構造的同化（structural assimilation)」であり、ホスト社会のさまざまな社交組織（教会、クラブ、パブ、コミュニティ組織）への参加が可能となるとともに、市民権も獲得し公的な社会参加も可能となる。この段階になると、移民とホスト社会の人々の接触も二次的レベルから一次的レベルへと移行していく過程が続く。ここにおいて人間関係が深まり、結婚なども認められる段階、すなわち「婚姻的同化（marital assimilation)」あるいは「融合（amalgamation)」とよばれる生物学的同化のレベルに進むことになる。

このような生物学的同化によって移民達はホスト社会の人々と同じ国民という感覚が与えられるようになり、「自己同定的同化 (identificational assimilation)」が生じる。その後、「態度受容的同化 (attitude receptional assimilation)」および「行動受容的同化 (behavioral assimilation)」の過程が生じるが、これらのレベルに達すると偏見と差別意識や態度がなくなるとともに、実際の行動にそうしたものが現われなくなる。そして最終的には「公民的同化 (civic assimilation)」という人種・エスニック集団間に、文化や価値の葛藤のみならず権力上の闘争もない理想的な状況に達することになる。ゴードンは、文化的同化から公民的同化にいたる一連の段階を同化過程としているが、二番目の構造的同化は後の同化過程を生み出す上で重要なステップと考えており、構造的同化という言葉によって後のすべての過程を代表させる場合が多い (Gordon, 1964: 68-71)。

パークとゴードンの同化理論は、アメリカ社会における非英語系ヨーロッパ移民の経験を土台としており、支配的文化（ホスト社会文化）に少数派の移民の同化が問題とされているが、いずれにせよ一世代の間に完全な同化が生じなくとも、二、三世代と経過していくうちに同化が生じ、人種・エスニック集団の境界は取り払われるようになっていくとしている。もっとも、ゴードンの場合には、文化的同化が生じても構造的同化のレベルまで進まないとか、そこで停止するとかあるいは文化的多元主義や構造的多元主義の発生も予測しており単純に同化論者であるとはいえない。それは、彼が改めてこうした事態、つまり「メルティングポットの終焉」(Glazer and Moynihan, 1970) を前にしてより一般的なエスニック理論を構築しようとしたことに現われている。彼は、「生物社会的発展系数 (bio-social development variables)」、「相互作用過程変数 (interactional process variables)」、「総社会的変数 (societal variables)」などの諸独立変数を導入し、同化ないしは非同化（多元主義）の諸条件をさぐる枠組をつくったし（第1図参照）、さらに、文化多元主義の重要性を後に主張するようにもなり同化のみを強調はしなくなった (Gordon, 1975=1984: 1981)。とはいえ、構造的同化を大前提として同化主義アプローチによりウエイトを置いていることも否定できないであろう。たしかに、彼

第1図　M.M.ゴードンの人種・エスニック集団関係の分析枠組



は、世界の大部分の国々が多元主義の国になりつつあることを認めつつも、多元主義型の複合人種・エスニック社会の不安定さを理由として積極的に多元主義社会への動きを支持してはいないように思われる（Gordon, 1975=1984: 143-4）。その大きな理由は、人種・エスニック関係にはなにがしかの非合理的で激情的になりやすい部分が存在している点への不安に基づいており、人間の合理性への不信も手伝っているようである（Gordon, 1975=1984: 128-120）。

ところで、今まで工業化、近代化と関連させて産業文明、都市文明の収斂を前提として、人々の同化について議論してきたが、同化という過程そのものは常に近代化とか国民国家との関連で生じるものではなく、要するに、人種・エスニック集団間の境界が消えて一つの新しい人種・エスニック集団が形成されることをいうわけであるからその適用範囲は広い。しかも、同化といっても強いエスニック集団の文化に併合されてしまう「編入（incorporation）」のパターンもあれば、「アマルガム化（amalgamation）」とよばれ、総合過程の中で全く新しいエスニック集団が形成されるパターンもあり、その現実の姿は多様といえる（Horowitz, 1975=1984: 111-4）。しかし、多くの人々が指摘するように、同化主義アプローチは往々にして少数民族や移民などのマイノリティ集団が支配的社会（ホスト社会）へ編入の型に従って同化されることを前提にしていることが多いため、必然的に強者の論理あるいはイデオロギーとなりがちである（de Lepervanche, 1984: 179）。また、そのために進化論的発想が土台となっていると

も指摘される。この点で、現在ではあまり注目されず、一九五〇年代、六〇年代のアプローチとみなされがちであるが（李、一九八五：一九一―二、石川、一九八三：二五八―九）、しかし、現在でもこのアプローチの基本的正しさを認めている研究者も多いことは注意しておく必要があろう（Smith and Dempsey, 1983: 587）。また、人種・エスニック問題の解決策の一つとしての可能性を全く否定することも軽率にはできないのではあるまいか。[5]

(二) 原初的特性重視アプローチ

「原初的特性重視アプローチ（primodialist approach）」は、同化主義アプローチに反対し、人種・エスニック的な違いを重視することは人間のもつ本質的な特性に基づくものであるとともに、人間は血縁、地縁、先祖同一性および個有の文化や言語、生活習慣を保持したいと思うものであり、それらに対して原初的愛着を感じるものだと主張する。たしかに、同化主義アプローチに立つ人々がいうように、時代と世代を追うごとに少数民族や移民、難民は支配的社会やホスト社会の文化や言語、生活習慣をある程度受容し自分達のそれらの一部を放棄する可能性があるとしても、基本的には血縁や血縁的つながり意識を土台として独自な文化や言語、生活習慣に固執しようとするものでもあり、とくに言語を維持しようとするものである。これは近代化と工業化の波の中でも生じる現象であると原初的特性重視アプローチに立つ人々は主張する。[6]

このようなことが存在するのは、この原初的特性重視アプローチを支持するH・J・アイザックスによると、そこには「基本的集団アイデンティティ（basic group identity）」が存在するからだということになる（Isaacs, 1975b）。

これは（基本的集団アイデンティティ……引用者）、一般的にそして大ざっぱには「種属集団」とよばれるものに所属することから派生するアイデンティティである。これは、「原初的な親近と愛着」とよばれるものから構成されている。それは、人間が生まれながらにしてもっているか、生まれたときに身につけるかしたものから成り立っているアイデンティティである。それ

は、人間が獲得するその他の多様で二次的なあらゆるアイデンティティとははっきり異なっている（Isaacs, 1975a＝1984: 42）。この点に関してさらにアイザックスの言葉を引用してみたい。

基本的集団とは、彼が放棄したいと思う可能性のあるアイデンティティなのだが、それは、誰も彼からもぎ放すことのできないアイデンティティなのである。それは、ロバート・フロストが主張した意味での家（ホーム）なのである。つまり君がそこにゆきさえすれば、彼らが君を迎え入れてくれる場所――ムームビィの家、子宮、子供の情動的な拠り所、ときには天然自然の場所そのもの――なのである。あるいは、今日のような大量移住の時代にあっては、物理的にも文化的にも非常にはなれたところに移動させられた多くの人びとにとっては、そうしたところは彼らが自分たちを運んでゆく避難場所、つまり、祖先がそれによって生活していたルールの殿堂、すなわち、答えることのできないものにたいする特定の回答のセットという意味での「伝統」とか「道徳」とかあらゆる形の信条とか信念なのである（Isaacs, 1975a＝1984: 48-9）。

アイザックスによれば、ともかくも人々は生まれながらにしてこのようなアイデンティティを自我の中にとり入れていくが、その基本的集団アイデンティティというものは、一般的にみると「なまえ」とか「肉体的特徴（からだ）」あるいはエスニック集団と結びつきの強い「土地や場所（郷土愛）」などと深い関連をもつものであると同時に、それらは基本的集団アイデンティティのバッジ（目印）として役立つものだということになる（Isaacs, 1975a＝1984: 53; 1975b）。

さらに注目すべきことは、このようなことは現代産業文明の波の中で逆に強化されていくと考えられていることである。つまり、人々は現代産業文明の波の中で生じる価値や規範の画一化、官僚制組織化を経験し、管理社会化の中で機械化され無個性化され、またさらに非人間化されていくわけであるが、それは他方で、伝統的な価値や文化とも切り離されてゆき、価値や規範の多元化、無規制化（アノミー）を経験することを意味する。その結果として人々はアイデンティティの危機を感じるようになる。こうした機能中心主義および普遍主義的基準の中に押し込められそうになる人々が、アイデンティティの喪失に抵抗する拠りどころとして基本的集団に執着するのである。故に、エスニックなものやエスニシティに対する愛着は人々に原初的に備わっているものと考えてよいことになるし、それなくし

ては伝統的社会であれ工業化された社会であれ、人々は生きていけないことになる（Isaacs, 1975a＝1984: 42-3）。

このようなことは、特殊主義から普遍主義への動きを強調するT・パーソンズによっても、近代化への一つの反動として認められている。

全体的なからみの中でとくに重要な現象は、前述した種属的連帯と自己同定の非社会化（de-socialization）の一面だと考えられよう。急速な社会変動状況にあり、さらにアノミックな社会解体と疎外にむかう傾向の下では、「集団主義」（groupism）の強化と集団構成員の地位ならびにアイデンティティにいちじるしく情動的な重みが加わるのが、反作用の主たる型なのである。この種の他の多くの現象と同じくそのなかには、社会的連帯にたいして潜在的な、そしてある程度表面にあらわれた破壊的な結果と同時に、その構成員がアノミーと疎外度の低い組織に住民を統合しなおす一種の建設的様式との複雑な組み合せが含まれている。この種の組織がなければ住民は無防備な状態におきざりにされてしまいかねない（Parsons, 1975＝1984: 93）。

パーソンズ自身は、だからといって原初的特性重視アプローチのいうような伝統的文化、言語、生活様式の維持や持続を考えているのではない。というよりは、エスニシティを「空虚なエスニシティ」として主観的、象徴的なものとして考えようとするとともに、エスニック集団加入の自発的および契約的側面を重視している。しかし、近代化への抵抗として生じる非社会化、非分業化（de-differentiation）が生じることは認めているのである（Parsons, 1975＝1984: 86-95）。ここに原初的特性重視アプローチが重視されるポイントがあるといえよう。さらに、こうした傾向が近代化過程の中に備っており、かつ人々は伝統的文化、生活様式への愛着を原初的に抱いているとすれば、当然、近代化の名において、伝統的文化や言語の多様性や異質性を否定し、標準語や標準的生活様式を押しつけようとする中央政府の政策（同化政策）に対しては抵抗が生まれることになるであろう。

この原初的特性重視アプローチは、近代化や同化論が、異質な文化や言語を持つ人々を近代化、同質化し部族的な偏見や島国根性から発生する紛争を避けることを重視し、さらに、社会的均衡の視点から人種・エスニック関係の安定化を期待していたのにもかかわらず、一九六〇年代、七〇年代においてその期待が裏切られてしまった事実を説明

するために新しく登場した一連の人種・エスニック関係研究のひとつとして生まれたものである。近代化、同化主義アプローチは、ユネスコによって採用され様々な努力が重ねられたが、偏見や差別、エスノセントリズムなどによる社会的紛争や時には内戦の発生は、開発途上国のみならず、先進諸国、たとえばイギリス（北アイルランド、スコットランド、ウェールズ）、ヨーロッパ（フランス、ベルギー、スイス、スペイン）そしてカナダ（ケベック）やアメリカ合衆国（黒人問題、インディアン）においても発生し、近代化論者の期待は裏切られたといってよいであろう（van den Berghe, 1979: 23-4）。

原初的特性重視アプローチは、どちらかというと文化人類学者のように伝統社会や少数民族研究をする者によって根強く支持されているものである。もっとも、エスニック集団の原初的愛着について強調するからといって、一九世紀から二〇世紀に展開された人種差別論者と同じと考えてはよくない。彼ら自身の立場は、イデオロギー的にはリベラル、反人種差別であり、文化相対主義的な立場をとっているので、旧世代との違いには重視すべきである。いずれにせよ、近代化論あるいは同化主義アプローチをとる人々とリベラルな点では同じとしても、普遍文化と同化を強調し、異質性に対してあまり寛容でない彼らとは文化相対主義を強調する点において一線を画しているといえよう（van den Berghe, 1979: 27）。

ところで、原初的特性重視アプローチは、今まで述べてきたように、同化主義アプローチが、条件次第では人間は異なったエスニック・アイデンティティを受容し、旧来のものを捨てることが可能であり、故に人種・エスニック集団間の境界を消すことができると考え、さらに、エスニシティにこだわること自体非近代的なことだと考えるが、その考え方に反対するものとして発展してきている点にも注意を向けたい。この立場にたつ人々は次のように考える。つまり、エスニシティに人々がこだわるのは、人々の意識や主観とは別に存在する客観的集団区分の指標が厳然と存在しているからなのである。[7] エスニック・アイデンティティへのこだわりは、その人々のもつ共通の肉体的特色や文

化――とくに言語や宗教そして生活習慣――というものが存在し、とくに先祖の同一性ならびに同類としての系譜というものが重視されるからであり、ある集団内の人々がエスニシティを否定し、他集団に所属しそのために同化しようとしても簡単にできるものではないということになる。名前を変えたり、服装をかえても身体的特色（肌の色や顔形）や伝統的生活習慣や言語を一朝一夕に変えることができないために、その人々が加わりたいと願う他のエスニック集団のなかに迎えられず、結局のところ境界人、マージナルな人間として排斥されてしまうのがおちである。こうした意味では、原初的特性重視アプローチに立つ人々は、エスニック集団の形成と構成員の確定にあたって主観を超えた客観的指標が重視されてしかるべきだと考えている。主観的で着脱可能なものとしてのエスニシティを想定する同化主義アプローチと正反対の立場にいるのである。

ところで、エスニシティあるいはエスニック集団の指標としては、身体的特質、文化・生活習慣、言語、宗教、名前、出身地および先祖同一性などがあげられるが、問題は原初的特性重視アプローチに立つ人々の間で議論が一致しているわけではないということである。[8] 客観的特性を重視するカナダのウクライナ系学者W・イサジフは、エスニシティの定義には様々な構成要素がみられるが（第1表参照）、なかでも共通の出身、同一文化、宗教、人種、言語などが頻繁に利用されるとし（Isajiw, 1974: 117-9）、彼自身は以下のようにエスニシティを定義する。

同一の先祖をもち、同じ文化的特色を示し、他方で同類意識を持ちゲマインシャフト的社会問題を維持し、さらに、移民と

第1表　W.イサジフによる定義の構成要素分類

属　　性	頻度
① 共通の民族的ないしは地理的出自あるいは共通の祖先	12
② 同一文化ないし慣習	11
③ 宗教	10
④ 人種ないしは形質上の特徴	9
⑤ 言語	6
⑥ 同類意識：「われわれ感情」同胞意識と忠誠	4
⑦ ゲマインシャフト的諸関係	4
⑧ 共通の価値ないしエトス	3
⑨ 独自の制度	3
⑩ 少数派ないし従属的地位あるいは多数派ないし支配的地位	2
⑪ 移民集団	1
⑫ その他	5

資料　Isajiw, 1974：117.
引用　綾部恒雄 1985「エスニシティの概念と定義」『文化人類学』1(2):11より。

しての背景をもち、大きな社会の中で少数者ないしは多数者の地位を占めている人々の集団ないしはカテゴリー（Isajiw, 1974: 118）。同じ文化を共有している人々の非自発的集団（involuntary group of people）、あるいは、自らによってあるいは他の人々によっても同一の非自発的な集団に属していると同定することのできる人々の子孫達（Isajiw, 1974: 122）。

しかし、文化的要素や言語などの要素はほとんど意味をなさず、また曖昧であり変化することもあるのだから、結局のところ先祖の同一性と系譜意識（the idea of shared descent）のみが唯一の客観的指標だとする者もいる（Keyes, 1976: 206）。こうした点で、客観性にこだわると指標の同定に困難が生じるという欠点がこのアプローチではとくに目立つようになるが、ともかくも集団間の境界を越えることは容易ではない、つまり自発的には越えられないという点に注目すれば、同化主義アプローチと対照的であることが判明する。

さらに、エスニック・アイデンティティなり集団へのこだわりは、同化主義アプローチによれば、残余的で非近代的、つまり非合理的ということになるが、原初的特性重視アプローチでは、たしかに非合理的ではあるが、残余的ではなく本源的なものとなる。そして単純に否定的に捉えられるのではなく必要なものとして肯定的に考えられている。エスニシティを合理的な思考の産物か否かという点でみると、同化主義および原初的特性重視アプローチでは同じ立場になっているが、主観的か客観的かという観点からみると対立的であるといえよう。(9) とくに文化相対主義的な立場が同化論的アプローチとは一線を画す点であるとともに、肯定的にエスニシティが把握される点は注目すべき点であろう。

(三) 文化的分業（国内植民地）アプローチ

「文化的分業（cultural division of labor）あるいは国内植民地（intercolonial approach）」は一般に「エスニック反動モデル（ethnic reactionary model）」（Nielsen, 1985: 134, Leifer, 1981: 26）ともいわれるが、この立場は同化主義アプローチお

よび原初的特性重視アプローチに反対するものである。[10]

同化主義アプローチは、基本的に工業化にともなう経済成長と社会の近代化によって人種差別や偏見、エスノセントリズムが消滅していくとするものであるが、それは主に以下の現象を土台としている。まず第一に、経済成長や民主化、教育高度化によって人々の所得の平準化や教育レベルの上昇が生じ、経済的不平等が減少する。第二に、経済圏の拡大によって部族的、地方の自給自足的経済圏の消滅が起き、人々や財物の移動や交流が盛んとなり閉鎖的コミュニティの存在が不可能になる。そして第三に、情報伝達手段の発達により都市的生活様式が拡散して行き、その結果人々の文化や意識が均一化していくことである。これらの現象を土台として、いわゆる地方的な偏狭性や部族意識およびそれらにともなう文化、言語への愛着も消え失せて行き、人種・エスニック問題は意味を失うというものであった。ここでは工業化社会の均等発展と文化、意識の収斂が前提となっていた（富永、一九八五：一〇七―一一〇）。

これに対して、文化的分業アプローチでは工業化や近代化は決して社会および国民全体に対し均等な影響を与えるものではないとする。つまり、経済成長による所得の平準化、マス・コミュニケーションの発達による意識の均質化というのは一種の幻想にすぎないのである。要するに、このアプローチは同化主義アプローチの社会の平準化、等質化の前提を拒否し、社会、経済の不均等発展を前提としている（Hechter, 1974: 214-5）。その文化的分業アプローチによれば、以下のようになる。都市中心に経済成長が工業化によって生じるが、そのことによって都市中心部（core region）と周辺部（peripheral region）との間に経済的格差が生まれ、中心部がはやくから経済発展の恩恵を受け教育の機会の拡大や生活様式の高度化が可能となるが、他方、周辺部の人々はその恩恵が遅れて波及するのを待たねばならない。周辺部はそればかりではなく、都市中心部への原材料、食料供給地として位置づけられ、産業面においても従属的地位に置かれるとともに、低賃金労働力の供給源として位置づけられ、中央によって搾取されることになる（Hechter, 1976:220; Reece, 1979:282-4）。

つまり、周辺部の人々は、教育機会の面においても不利なため中心部へ行って就職しようとしても高い収入があり安定した第一次労働市場内に就職先を得ることができず、単純、不熟練作業労働中心にした第二次労働市場において就業せざるを得なくなり、都市中心部の人々との間に格差が生じるのである。中心部の人々のつく職業と周辺部の人々のつく職業との間には溝ができ二重労働市場が形成されることによって分業体系ができあがる。この時に、中心部の人々と周辺部との間に人種・エスニック的差異が存在すれば、それはいわゆる文化的分業を形成することになる。こうして中核的な都市中心部と周辺部との間には経済、政治そして文化の各面において格差が生まれ、支配と従属関係、すなわち国内植民地関係が発生する。こうした関係がひとたびできあがると、都市と周辺との間には、福祉、教育制度の面において差が維持されるのみならず、国民一人当りの収入などの経済的格差も維持されていくようになる。さらに、国政レベルにおける議会代表状況においても不利が生じ、人口に比例して地域を代表する議員が少なかったり、あるいは内閣における大臣職に任命される割合が極端に低いといったことも生まれる。その結果、政治的にも経済的にもマイノリティーとして位置づけられて固定化されるのである（Reece, 1979:287-8）。

一般的にいって、中央と周辺地域との間に明確な分業体系ができた場合を「国内植民地」モデル型分業体系とし、同一地域内において分業体系ができた場合を「文化的分業」と呼ぶ場合が多い（McRoberts, 1979: 269）。しかし、一般的にみると中央と周辺の二つの地域が全く孤立しているわけではないし、そうであればそもそも分業体系ができないであろうから相互交流があるはずで、この二つをあまり厳密に区別はできないだろう。なぜならば、近代国家の形成と行政管理機構の拡大、工業化にともなう中央経済勢力（工場、銀行、商業など）の周辺地域への進出、あるいはその逆の周辺地域からの都市への低賃金労働力の移動は、都市および周辺双方における「階統型文化的分業（hierarchical cultural divsion of labor）」を発生させることになるが、これは当然、周辺地域が国内植民地化されていることを意味するので両者には密接な関連がみられるはずである（McRoberts, 1979: 295-6）。

ところで、階統型文化的分業とは、職業別文化的分業の間に上下の社会的格付と生活機会の差異を想定するものであるが、他方で「分離型（segmental）文化的分業」というものも存在する。その場合、特定職種へのエスニック集団の集中が生じても、各々の間にとくに上下関係をみない場合をいう（Hechter, 1978: 312; Hechter and Levi, 1979: 263）。文化的分業といっても階統型と分離型があるが、この区別は、同じ文化的分業といっても、時には周辺地域の方が経済的には有利であり、その結果、中央による政治的支配からの独立や自治を要求する場合があり、常に中央と周辺との間に上下の関係が存在するとはいえないからである。とくにスペインのカタロニアやバスク地方の運動、あるいは北海油田発見後のスコットランドなどが例としてあげられる。一般的には階統型文化的分業の方が紛争を生じる可能性は大きく、とくに下層エスニック集団に不満が生じやすいとされているが、分離型の場合には安定的であるとされている。しかし先の例に示されるような紛争は決して少なくはない（Hechter and Levi, 1979: 263）。

文化的分業アプローチでは、このような支配―従属関係が周辺部の人々によって意識されるようになると、そこに被支配者側からの対抗運動が芽生えてくると仮定する。この時に注目すべきことは、同化主義アプローチでは、マス・コミの発達による同化能力の面が強調されるが、都市からの中流階級志向の情報（広告）が逆に都市と周辺部との間の格差を目立たせることになり、逆に差異の感覚を強め不満を周辺部の人々に植えつける点が指摘されていることである（Burgess, 1978: 279）。しかしいずれにせよ、被支配者側からの格差是正への動きが生まれてくる場合に、従属集団が文化、政治、経済的にも搾取されている度合が高く、かつ支配者集団からの抵抗が強く、妥協なり協調が得られない場合には平和的な政治、社会運動もテロや暴力をともなう攻撃的ないしは分離・独立運動へとつながる危険が多い。そして国家の土台が揺らぐような対立へと進むことも多くなるので国家の対応は重大問題となる[11]（Hechter and Levi, 1979: 266–70）。

この文化的分業モデルは、マイケル・ヘクターによって主張され、イギリスの歴史的発達過程の中において実証さ

れたとされ支持者も多い。[12] 彼は、イングランド（ロンドン）を中核とする地域がウェールズやスコットランドそして北アイルランドを周辺地域として発展したために、結局のところイングランド系の人々とその他の地域の人々との間にエスニックの線に従った分業が生じたとしている。そして、近年に至って中核地域の支配に反抗する形でウェールズやスコットランド、北アイルランドの政治的活動が活発となり、自治権獲得運動にまで発展したということになる。こうした視点でみると、ヨーロッパ各地で生じた人種・エスニック紛争や政治運動、とくに一九六〇年代、七〇年代に生じた少数民族運動も理解可能になるとされている（Hechter, 1975; 1973）。[13] また、これは移民や難民の場合にもあてはまると考えてもよいであろう。とくに先進諸国に流入している外国人労働者の場合である（Hechter, 1976: 221; 1978: 311）。

ところで、同化主義アプローチが近代化と工業化の展開とともに、社会の対立基軸が階級に移行し、部族的なもの、エスニックなものは背景に退くと同時に、その階級もダーレンドルフの主張する階級闘争の制度化によって分裂の基軸としての力を失っていくという形で社会発展を楽観的にみているのに対して、文化的分業アプローチは、階級的分裂は近代化の中においても残るのみならず、前述してきたように往々にして複合人種・エスニック社会においては、階級分裂に重複し追加されるべき分裂としてみなければならないとする。その点で悲観的であるといえよう。しかし、マルクス主義の立場と異なるのは、階級闘争はそれ自体では生起しにくいものであり、エスニックなるものが加わることによってはじめて強力に始動するものであり、階級闘争はエスニック紛争と重複する時に最も強くなるとしている点である（Leifer, 1981: 27-30）。このような観点は次の引用によく現われていると思われる。

> エスニック地域組織（ethnoregional organization）は、政治的組織などと同じように、組織を維持するためにはその支持者達の物質的利益を充足させねばならない……。
>
> しかし、物質的刺激だけで十分だというわけではない。この点に関してみるとエスニック地域組織は、同地域内の文化的な違

いをもって組織されていない他の組織に対して明らかに有利であるといえる。それは、文化自体が刺激となるからで、エスニック地域組織が文化の存在を再確認するとともに、人々が大切にするエスニック集団の一員として支持者に自己同定できる機会を与えることができるからである。歴史的に一つの民族として存在したという主張とそれに対する特別の承認を求めることは、その組織の存在の正当性をさらに強化することになる（Hechter and Levi, 1979: 269-70）。

このような形で文化的分業アプローチが、エスニシティを積極的に評価している点は、どちらかというとエスニシティを逸脱とか虚偽意識の問題として捉えようとする傾向の強いマルクス主義の伝統と一線を画しているとともに、ウェーバー的階級・階層論に近いといえよう（Hechter, 1978: 293-4）。

もっとも、同化主義アプローチにおいても現代社会においてエスニック集団の運動の存在を認めている。しかし、これは階級運動とエスニック集団間の対立の軸が重なった時のみであり、同化主義アプローチも文化的分業の残存を認めているわけであるが、文化的分業アプローチのようにエスニシティを積極的には評価してはいない。あくまでもエスニシティは階級に対して従属的であり例外的なケースであると考えている（Leifer, 1981: 27）。

しかしだからといって、文化的分業アプローチは原初的特性重視アプローチのようにエスニシティを本質的で根源的なもので、不変的なものであると考えているわけではない。よく指摘されることであるが、ヘクター自身は、文化的分業や国内植民地状況がエスニック集団の運動や闘争の結果なくなれば、エスニシティなり人種への人々のこだわりはなくなり、社会統合は順調に進んでいくと考えていることからもわかるように、エスニシティを主観的なものとして考える傾向が強い（李、一九八五：二〇三―四）。

以上から、文化的分業アプローチのエスニシティに対する考え方は、前二者のアプローチと立場が異なることが明らかである。同化主義アプローチによれば、人種・エスニシティにこだわることは差別と偏見を温存することになるし、本来的に非合理的なことだということになる。また、原初的特性重視アプローチからみればエスニシティは人間

集団の基礎的アイデンティティを構成するものであり、それ故に人々の感情や愛着と深く結びついているもので合理的、理性的観点から取捨選択が簡単にできるものではない。その点でやはり非合理的であり理論で割り切れないものがあることになる。しかし、文化的分業アプローチの観点からすると、エスニシティへのこだわりとエスニック集団の活性化は非合理的な伝統や感情そのものに基いたというよりは合理的選択（rational choice）の結果であるということになる。つまり、政治的にも経済的にも従属的な立場に置かれている人々が、支配者集団に対して抵抗するために人々を動員し組織化して社会運動を展開し、時には暴力やテロをともなう行為を行うとしても、ともかくも集団形成のための構成員参加資格や集団の境界を定めるために合理的に選択するものなのである。まさに集団形成のための道具であり、時には支配者集団なりホスト集団への同化を長い間努力していたため実質的な文化的指標（言語、宗教、習慣など）を失った場合でも、意識的な努力によって内容を再び獲得し違いを目立たせようとする場合もある（エスニシティの再生）ということになる（Levi and Hechter, 1984: 15, 26; Hechter: 1983）。

文化的分業アプローチに従えば、エスニシティは主観的なものであり、合理的なものということになり、人々は文化的、すなわちエスニック集団に参加して得られる利益が他のものに参加するより高いと判断すれば参加するであろうし、エスニック集団を代表する政党を支持することになろう。しかし、そうでなく他の集団（例えば組合、宗教団体など）に加わるとか支持することに利益をみればそちらを優先するであろうし、またエスニック集団や政党が一定の目的を果たせば参加、支持を停止することになるであろう。[14] このように考えてみるとエスニシティの再生も含めて、原初的特性重視アプローチとは異なり、常に客観的で人々の意識とは無関係に基準は存在するという考え方が文化的分業アプローチにはないことが判明する。また、それ故に、エスニック集団の境界の設定もエスニック集団構成員の自覚的努力によって内側から設定していかねばならない。外から受動的に決められるというよりは内側からの規定に多くを依存するといってよいであろう（Allardt, 1981: 98-100）。

もっとも、文化的分業アプローチにおいては、都市と周辺の対立図式が重視されているので、実際上は周辺部においては古い文化自体が残存している、あるいは実質的に機能している事例が多くあげられる。[15] しかし、そのような場合でも、文化的内容そのものの維持あるいは再生そのものを期待しているというよりは、政治的、経済的権力や利益の拡大、維持のための口実としての役割がエスニシティに与えられていると考えるべきだという点は注意しておく必要があろう。とくに、第二次世界大戦前から対立があるような場合、古い対立と戦後の新しい対立との間に微妙に質的な差異があることはよく指摘される点である（Reece, 1979: 257-9）。

㈣ エスニック集団競合アプローチ

「エスニック集団競合アプローチ（ethnic collective competition approach）」は、「拡散—競合モデル（diffusion-competition model）」あるいは「エスニック資源競合モデル（ethnic resources competition model）」（Nielsen, 1985: 133）などといわれるが、このアプローチは近年、文化的分業アプローチに対抗するものとして発達の度合を高めており[16]（Nielsen, 1985: 133）、一般的な社会運動の理論として近年注目を浴びている「資源動員アプローチ（resources mobilization approach）」[17]に対してもっとも親近性が高いものであるといわれている（Olzak, 1982: 254）。このアプローチは、文化的分業アプローチや同化主義アプローチとはいくつかの点で違いを示しながらも、共通点も存在し、対抗的であるとともに補完的な関係を維持しているといってよい。

エスニック集団競合アプローチでは、エスニシティあるいはエスニック集団について定義をする場合、主観的なアプローチをとるとともに、感情表出的で存在集団としてのエスニック集団と考えがちな原初的特性重視アプローチに反対して、利益表出的で目的および機能集団としてエスニック集団をみなし、その道具的性格を強調する。この点で文化的分業アプローチと同じ土俵の上に立つといえよう。しかし、文化的分業アプローチと異なる点は、現代先進社

会、いわゆる脱工業化社会においては階級（労働組合運動）がその機能を果たさず、社会集団形成の原理として十分機能しなくなっており、エスニシティが階級に替わる集団形成あるいは運動の基軸となりつつあると考えるところに大きな特色をみることができる（Nielsen, 1985: 135, 144-5; Hannan, 1979: 265）。すでに明らかにしたように、（階統的）文化的分業アプローチでは階級とエスニシティの合体を重視し、階級意識を強化する起動力としてエスニシティをみているのであり、階級ないしは階級対立を重視している一面があるという点は見逃がせない。

ところで、今までの記述からもわかるようにエスニック集団競合アプローチは、社会変動の見方において同化主義アプローチと同じ立場にあることが判明する。しかし、それとは異なりエスニシティないしはエスニック集団の再生、活生化を予見することになるが、それではどうしてエスニック集団なる属性的性格の強い社会集団が現代社会において多様な形で出現してくるのか、エスニック集団競合アプローチの考え方を追ってみることにしたい。

よく指摘されることだが、現代社会において労働組合は、文化的分業を克服する装置としては十分な役割を果たさなくなる。すなわち、組合は体制変革の装置ではなく、社会の主流となった特権的労働者（労働貴族）の利益集団と化しており、周辺部からの労働者の侵入に対しては本能的に反発するようになる。それは、周辺部（あるいは移民労働者）からの労働者は低賃金労働者であることが多いからである。低賃金労働者を歓迎するのはむしろ資本家階級であって、低賃金労働者が文化的にも人種的にも異なる場合、組合による反発は高まるであろう。この点で労働組合は中心部の労働者の道具であることが判明する。その結果、同じ労働能力を持ちながらも低く労働価値が見積られるというスプリット労働市場（split labour market）が発生することになる（Bonacich, 1972, 1973; Hannan, 1979: 272-3）。また、労働組合の中でも変化が生まれる。つまり、工業化の高度化とともに職業・職種の再編と多様化が進み、熟練労働から単純労働までの所得格差や職業意識の違いなどが目立つようになるとともに、組合自体の巨大化、官僚制化も進みその中での権力格差の発生もあり、結果として一枚岩としての労働者の結束は弱体化してしまうのである。それは階

級的連帯や階級意識を弱め、同質性よりも異質性が目立つようになる傾向を助長する（Nielsen, 1985. 144）。

既に述べたように、社会運動の中核であった労働組合が社会体制（構造）の抜本的改革や革命から、既存の社会的枠組の中での利益競争の主体へと転換することは、社会変革の独占的運動主体としての地位を捨てさるとともに、他の利益集団や社会運動体の発生を許すことになる。組合の力の相対的低下は、他方でブルーカラー職種の減少によっても決定的となるが、これまで組合運動に希望を託していた人々の減滅と反抗が生まれ、他の集団原理をもって独自の社会運動、利益集団を形成する動きを誘発することになる。[18] とくに、主流派の労働組合（男子労働、正社員たる中核的エスニック）に対し、周辺的労働者、すなわち少数エスニック集団（移民、外国人労働者を含む）、女性、パートタイム労働者、身体障害者、逸脱者（ホモ・セクシュアルやレズビアン）などの集団が活動しはじめるが、こうした中でエスニック集団も重要な存在として地位を確立することになる（Bell, 1975＝1984: 223; 山口、一九八五：一七）。

とくに、エスニック集団の場合には、一方で利益集団として合理的な政治、経済上の計算が働くとともに、文化、言語、宗教、先祖同一性などのエスニックなるものを構成する要素が感情表出的で情緒的な面に訴えるものを所有しており、これが階級的利害を広範に動員しようとする組合運動に比べて、今日ではより動員力を持つ原因となっているとエスニック集団競合アプローチは考える（Nielsen, 1985: 145; Bell, 1975＝1984: 223-4）。

エスニック集団競合アプローチでは、近代化において結局次のような集団形成や集団の連帯基準を設定することになる（Nielsen, 1985: 141）。

(一) 家族、親族そして小さな居住集団のような小型で地方的なアイデンティティを基礎とした集合的連帯
(二) 階級意識あるいは広く規定された職種別基準に基づく集合的連帯
(三) 多くの観察者を驚かせた抱括的な定義によって示されるエスニシティを基礎としたエスニック的連帯

すなわち、部族的、家族的な集団から、階級・職能別集団（労働組合）そしてエスニック集団という集団類型の変

遷を歴史的に捉えようとしたといってよいであろう。この変遷を「近代化社会における政治的連合体系の自然進化(natural evolution of the system of political alignments in a modernizing society)」とするが、エスニシティの内容は、むろん伝統社会のそれと異なっていることはいうまでもない（Nielsen, 1985: 147)。

このようにみてくると、文化的分業アプローチに比べて階級および階級闘争に対する評価が著しく低いことが判明する。この点では同化主義アプローチと立場は同じであるが、エスニックの再生、活生化という点では立場を異にする。しかし、エスニシティを主観的な観点から捉え、かつエスニック集団の形成とそれへの加入に対しては合理的選択が大きく影響している点に注目するが、これは集団競合アプローチが文化的分業アプローチに親近性を示すことを明らかにする（李、一九八五：一九九)。しかし、それでは階級に対する評価の違い以外に差異はないのであろうか。

階級に対する観点とともに注目しなければならない違いは、エスニック集団の形成や再生と動員過程に対する解釈にある。というのは、文化的分業アプローチでは、中核地帯と周辺地域との間の階級的対立度、すなわち分化的分業の度合と固定化、抑圧と搾取の度合が高いほど従属的周辺集団側からの反動が生じ、不満の高まりが運動を発生させ集団の形成を促すことになる。欲求不満――攻撃型の心理的メカニズムの発動がそこに見られるといってよい。反動としてのエスニシティなのである。しかし、エスニック集団競合アプローチはこの立場をとらない。エスニック集団競合アプローチからみると、文化的分業が固定化され対立度が高い場合には、逆にその差別体系は安定してしまうとみる。つまり、支配―被支配者集団間の対立は、政治的にも物理的にも圧倒的な力を持つ支配者集団（常に数量的に多数とは限らない）の存在によって往々にして潜在化してしまうとともに、被支配者集団への同化圧力も強くなってしまう。それ故に、エスニシティの差を基軸とした反抗などもっての他という状況になる（Nielsen, 1985: 147)。極端な例としてアメリカの黒人奴隷制があげられる。この場合、最も抑圧的、差別的な権力関係があるにもかかわらず家父長的人格関係が存在し、社会的距離の遠さにもかかわらず身体的距離、人格的関係は近い故に親密で安定的な関係（家

父長的関係）が存在することにもなる（van den Berghe, 1979: 32, 1978: 27-9）。

それではエスニック集団競合アプローチではどう考えるのであろう。この立場に従うと、近代化と工業化は結局のところ文化的分業を遅かれ早かれ打ち砕す方向へ社会変動を生み出し、不均等発展は見られても周辺部の人々を含んで経済成長はなされるとみる。その結果、教育体系や交通網や情報伝達体系の整備と発達は周辺部の人々をも新しい国民的経済、社会体系および政治体系の中に組み込まざるを得なくなる（近代化による政治・経済体系の同質化）。そして周辺部の人々にとって個々の努力目標や生活圏も変化し、一つの国民国家の体系の中に組み込まれ、中核都市部の人々と同じ生活圏、社会圏つまり同じ土俵の上で職や教育の機会をめぐって競合することになる。つまり、個々人の生活目標や生活体系は同質化していく。もはや自給自足的で孤立的な生活は不可能となるのである。そしてかつての文化的分業や孤立性が砕れていき、周辺の人々は積極的に中核集団の文化―価値体系に同化し、中核集団がこれまで文化的分業によって独占していた職域へと進出して行ける可能性が高まる。こうなると、同化を強要していた中心都市の人々も、いざそれが現実化してくると既得権維持のため新参者を拒否することになる。この結果、中心―周辺の人々の間に文化的同化が生じはじめたにもかかわらず、構造的差別が存続することになる。要するに、様々なレベルの職業あるいは教育機会をめぐる競合あるいは経済的にも政治（軍事・警察も含んで）的にも重要なポストをめぐる競争が生じ、経済的、政治的稀少資源をめぐる争いが発生する。結局、こうした中で既得権を持つ中核集団の人々が、制度的、非制度的差別を行使して周辺集団の接近を制限するような場合に、いわゆる周辺エスニック集団と中核エスニック集団との間に紛争が生じるとともに、被支配者は差別を受けているエスニックの人々を組織してエスニック運動を展開することになるのである（Hannan, 1979: 264-74; Nagel and Olzak, 1982: 130-9; Nielsen, 1985: 141-5）。

アメリカにおける白人と黒人の関係をみる時、黒人に対する差別、偏見が最も白人によって攻撃的な形で発現してきたのは、南北戦争以後、黒人が奴隷から解放されて行き、後に南部から北部へと大量に移動して行く時代とされて

いるが、それはまさに白人と黒人の文化的分業体系が砕れかけていく時代と一致するといってよいであろう[19]（van den Berghe, 1978: 29-33）。

ところで、このアプローチは、今まで述べてきたように、階級に対する態度の変化および社会の近代化、これには国家機構の近代化（state modernization）と工業化・脱工業化の発展が含まれるが、これらの進展によって文化的分業が稀薄化していくとともに人種・エスニック関係が対立・紛争の形をとりやすくなるとしており、文化的分業論に対立することが判明した。この議論は、一方で近代化とともに社会の中の各人種・エスニック集団が社会の中核に向かって参入すると仮定している。つまり、社会内のすべての人々が同じ社会構造の中に吸収され同化されていくことを意味する。しかし他方で、その過程の中で逆に人種・エスニック関係が否定的な形で顕在化し、周辺の各人種・エスニック集団は支配的集団に対抗するために各々の連帯を強化していくことになるとする。同質化と多元化の二律背反が想定されている。しかし、注意しなければならないのは、小さな単位の自給自足的な小部族的なエスニック集団が存在していた社会が近代化する時、これらの小さな単位は必然的に他の集団と連帯しなければならないということである。それは、主流エスニック集団と対抗する時、近代国家の中においてはあまりに勢力が小さいからで、国家に対する政治的参加、例えば参政権が与えられるような政体上の近代化（polity modernization）がなされても、国家政策にインパクトを与えられないからである。ここにある程度の同化が前提とされなければならない。つまり、周辺エスニック集団の境界の変動が要請されるのである（Hannan, 1979: 266-7, Nielsen, 1985: 141-2）。

このような境界変動が生じるのは、実は近代化、工業化、都市化によって、周辺のエスニック集団に対しても文化的同化が推進されるとともに、コミニュケーションや交通手段の発達によって共通な地位の認識がなされ、以前はバラバラであった人々が連帯可能となるからである。そして人々はより大きな資源を獲得し動員することが可能になり、新たなエスニック・アイデンティティを得られるようになるのである。それ故に、文化的分業アプローチが、停滞性

や後進性を強調するのに対して、エスニック集団競合アプローチでは、逆に人種・エスニック紛争や差別と偏見の動員は、産業の発展が著しく中心都市からの近代化圧力が最も高く動態的な地域で発生することに強調が置かれるようになる (Nagel and Olzak, 1982: 135-6)。実際、同じ人種・エスニック紛争でも、紛争発生のメカニズムの解釈が異なるので二つのアプローチは対立的な見解を示すことになる。エスニック集団競合アプローチが拡散—競合モデルとされるのは同化的側面と近代化がある程度進んでおり、動員できる資源と周辺エスニック集団間の連帯による、より大きなエスニック集団の活生化可能な側面を強調するからである (Nagel and Olzak, 1982: 133)。さらに、社会運動における資源動員モデルは、社会運動が歴史的にも極貧地域よりも、しばしば発展地域において発生することを強調するが(長谷川、一九八五：一二七—八)、この点はエスニック集団競合アプローチと前提を同じくするものと考えてよいであろう。いずれにせよある程度の同質化、近代化を強調する点にこのアプローチの特色がみられる。

以上のように、工業化、近代化による同質化の影響を十分確認しつつも、支配者エスニック集団からの反発によって周辺集団はエスニシティを再生することになり、同化主義アプローチのように短絡的に同化を説くのではなく、近代化と多元主義的権力構造が人種・エスニック集団間に発生し、圧力団体としてのエスニック集団が稀少資源を求めて競合しつつ国家に対し圧力をかけ、意思決定を変更させ影響を与えるために様々な資源を動員するという状況が今日のエスニシティ問題の特質であるとエスニック集団競合アプローチは指摘するのである。その点で、エスニシティを主観的にとらえ、シンボリック・エスニシティを強調し、合理的、功利主義的な性格および道具的性格を強調し文化的分業アプローチと同じ立場に近いにもかかわらず、階級への態度、紛争、集団形成過程に対する解釈、同化の度合についての見解において微妙な違いをエスニック集団競合アプローチは示すといってよいだろう。

二　コンティンジェンシー・アプローチの可能性

(一) アプローチの相補的対抗性

前節において、複合人種・エスニック社会における人種・エスニック関係研究における四つのアプローチを不十分ではあるが、比較しその特徴についてみてきた。本節では、まず、四つのアプローチの検討から得られた人種・エスニック関係研究についていくつか論点をまとめることにしたい。その後に、現代先進社会の人種・エスニック関係状況を理解する上でどの立場が最も有利と近年考えられているのか検討してみたい。その際、前節の検討より得られた論点を土台としたいが、筆者としては、どれが最善の方法かという観点に立つよりも、四つのアプローチの相補的対抗性、補完性（梶田、一九七六、塩原、一九七五）を重視するより柔軟な視点を明らかにしたいと思う。

まず、論点についてであるが、第一に指摘しうることは、四つのアプローチをみて注意すべきことは、今日、近代化され工業化された先進社会であっても人種・エスニック問題から免疫ではなく、社会的紛争や差別、偏見などの原因としてのエスニシティはいつでも条件が整えば活生化し、政治的・経済的にも問題を引き起こし得るという点である。そしてそれは支配的エスニック集団やホスト社会の対応によっては、暴力や紛争をともなった過激なものにもなりうるということである（van den Berghe, 1979: 24）。

第二に注目すべき点は、しかしながら他方で、特定の社会的条件が整えば、エスニシティは紛争の種としては重要でなくなると考えられてもいる点である（人種・エスニック紛争の宿命論はとらない）。四つのアプローチは、エスニック紛争や差別と偏見の発生メカニズムを明らかにするだけではなく、その紛争の解決や発生を未然に防ぐための論点を明らかにしようとしている。基本的には、近代化、工業化による不均等発展やそれにともなう社会的不平等が人

種・エスニック集団間に見られなくなり、文化的分業や構造的差別がなくなればエスニシティを基軸とした社会的分裂はなくなるということになろう。むろん、エスニシティそのものが消失するとすべてのアプローチが考えているわけではない。とくに原初的特性重視アプローチが例外といえようが、他のものは集団形成要因としての機能がなくなれば同化が進みエスニシティは消滅することも十分ありうるとしているのである。

しかし第三に、文化的分業アプローチおよび集団競合アプローチが明らかにしているように、社会の稀少資源、生活チャンスの競争というものはある時点で終了するという見込みが容易にたつものでもなく、さらにそれらが権力闘争に発展すればいつでも潜在化していたエスニシティが再生されて、人種・エスニック紛争や差別と偏見が顕在化する可能性があるということである。さらに、原初的特性重視アプローチは、当然のごとくエスニシティの存続を予測するが、文化相対主義的な態度と異文化理解が弱まり同化主義やエスノセントリズムが発生する状況や条件があればやはり紛争の発生があるとみている。いずれにせよ、エスニシティの重要性は時々の社会的状況や環境に大きく依存しているということである（Nielsen, 1985: 135; Hechter, et al., 1982）。

第四に、第三の点と関連するのであるが、人種・エスニック関係は当該の複合人種・エスニック社会の不平等分業体系や不公正な階層システムの存在と大きな関連をもっており、社会構造にも大きく依存しているということである。しかし、社会的不平等のない社会は当然実現し得ぬものとすればいつでも人種・エスニック問題は発生する余地を残しており、不断の努力がその発生を阻止するために要求されるということである。

第五としてあげられることは、四つのアプローチを検討していえることであるが、エスニシティあるいはエスニック集団にともなうさまざまな紛争や差別と偏見などは、一部分の非合理的で非近代的な特殊なパーソナリティをもった人々（権威主義パーソナリティや欲求不満の強い人々）の起こす逸脱的行為にすぎず、こうした問題は再教育か医学的、心理学的処置で十分解決するという考え方から、社会の文化的価値・規範や経済―政治構造や権力・利害闘争の結果

第2表　エスニシティ特性の変遷

客観的	主観的
感情表出的	利益追求的
存在集団志向的	機能集団志向的
非合理的	合理的
非自発的	自発的
伝統重視的	象徴的
境界不変的	境界変動的

でもあるという構造的視点へと強調が移動（ミクロからマクロへ）している点である。その結果として、研究が社会心理学中心であったものが学際的性格を示すようになったということである。

第六として、こうした研究展開の中で、エスニシティおよびエスニック集団の定義なり特色づけにも大きな変動がみられたということである。その点を図示しておくと第2表のようになる。ところで、この点に関してみると、エスニシティが原初的愛着に基づく客観的で静態的、かつ非合理的なものという性格から、主観的で流動的、かつ合理的選択の結果選択されたものという道具的性格を強めた解釈によって特色づけられてきているといえよう（Olzak, 1982: 254）。とくに資源動員論的なエスニック集団競合アプローチでは、「政治的通貨（political currency）」としてのエスニシティという考え方まで提出されている（Anise, 1979）。このような考え方は、文化というものを究極的な行動決定要因としてみる従来の文化観とは異なっている。すなわち、文化は一種の「道具箱（tool-kit）」であって必要に応じて、つまりある政治的、経済的な目標達成のために時に応じて利用しうるものであり、また取り引きの材料にもなるという集合行動のための資源としての文化観であるといってよい。つまり、「究極的価値（terminal values）」としての文化から、「道具的価値（instrumental values）」としての文化へという、観点と強調の移動が注目し得ると思う（Swidler, 1986）。

第七として、どのような形であれエスニシティの重要性が認められ、今日、多くの複合人種・エスニック社会では、人種差別政策はもとより強制的な同化政策が影を潜め、統合政策なり多元文化政策など文化的多様性の承認をする政策が一般的になりはじめているといえよう。同化か多元主義かという観点からすると後者にウエイトがかけられるようになったのだが（Schermerhorn, 1974: 4）、これも現実の人種・エスニック関係に関する研究の発展とともに生じた変

化のひとつであるといってよいであろう。それはまた、文化相対主義の普及により文化的差異がネガティブなものからポジティブなものへと変化し、消極的なものから積極的な性格をもつものとして特色づけられるようになったことと関連する（Allardt, 1981: 82-3）。

さて、以上のように前節で扱った四つのアプローチの検討から幾つかの論点が抽出されたわけであるが、次にこれらを土台として、四つのアプローチのうちどれが最善と思われているのか考えてみたいと思う。一般的な評価傾向からみると、同化主義アプローチおよび原初的特性重視アプローチよりは、社会運動としてのエスニシティ運動、つまり集合行動（collective action）としてのエスニシティ研究の範ちゅうに属し、資源動員論に親近性を示す後二者のアプローチの方が、今日の先進国、開発途上国の人種・エスニック紛争などの説明により有効と思われている。さらに、近年においては、文化的分業アプローチよりは、エスニック集団競合アプローチの方に注目する人々が増大しているようにも思われる。しかし、先にあげたいくつかの論点からみて、果たしてそのように単純に判断してよいであろうか。筆者としては、論点をまとめるなかで、以下の点にさらに注意しなければならないと思われた。

まず第一にいえることは、人種・エスニック関係状況を説明する視点は多様であるが、それは現実の人種・エスニック関係――第三世界から先進国を含めて――そのものが極めて複雑であり多様性に富むという事実を反映しているのではないかということである。それ故に、一つのアプローチでもってすべての人種・エスニック関係や問題を解明し、解決しつくすことはできないということである。しかしこれは、逆の視点からみると現在は、「人種・エスニック関係論のジャングル」といわれかねないような理論的戦国時代でもあるといってもよい。とりあえず本稿では、四つのアプローチに焦点をあわせてきたが、その各々のアプローチを主張する人々の間にも微妙な論点の差異が存在しているのである。

しかし、これに関連して注意しておきたい第二の点は、これら四つのアプローチは相対立するものとして一般に受

け取られているが、本稿で示したように、互いに共通点も多く、相互に対立的でありながら補完的でもあるのではないかという点である。J・マッケイが原初的アプローチの客観的エスニシティ認識と広くみた動員主義アプローチ（文化的分業およびエスニック集団競合アプローチの双方を含む）の主観的エスニシティ認識の補完性を強調し、人種・エスニック関係のマトリックス・モデルを提出しているし（McKay, 1982: 401-3）、F・ニールセンは、自身はエスニック集団競合アプローチを支持しつつも文化的分業アプローチとの相互補完性を強調している（Nielsen, 1985: 147）。さらに、E・M・リーファーは、同化主義アプローチと文化的分業アプローチを対比させつつ両者の有効性と問題点を指摘し、両者の関係を明らかにしているが[20]（Leifer, 1981: 29-31）、これらの研究からいえることは、各々は状況的あるいは環境に応じて相互に補完的に利用しうるのであって、時々の状況に応じて選択的に利用した方が、対立を強調して不毛な議論をするよりもずっと建設的ではないかという点である（Nielsen, 1985: 147）。

ある意味で、これらはR・K・マートンのいう中範囲の理論の範ちゅうに属するものであり、かつその領域において拮抗し対立する様々な理論ではあるが、普遍的説明力はなく地域的、状況的そして時代的にみて限定的なものだということである。これが注意すべき第三の点である。それ故に、人種・エスニック関係視点を必要とせぬ場合も含めて、状況にあわせて四つのアプローチを選択的・補完的に利用して説明していこうとする「コンティンジェンシー・アプローチ（contingency approach）」が当面の間――つまり、より統合化され一般化された理論が可能となるまで――必要とされるはずである[21]。これは悪くいえば折衷的と評されるかもしれないが、多くの人種・エスニック関係論者の立場が、多かれ少なかれ折衷的だということも確かであるとすれば（McKay, 1982: 401; van den Berghe, 1979: 27）、現在の複雑で変化の多い人種・エスニック関係を説明する上で有効であるといえよう。実際、四つのアプローチが理論的に競合しつつ、互いに相手を決定的に論駁し自らパラダイムとなることができないこと自体が、コンティンジェンシー・アプローチの必要性を明らかにしているのである。それ故、同化から多元主義の幅広い視点がとりあえず研究上要

請されるのではあるまいか。

結局、四つのアプローチを検討して得られた論点は、人種・エスニック関係状況は、時々の人種・エスニック集団構成員の心理的態度と各集団間の相互作用パターンを規定する社会的条件、環境に大いに左右されるということであるとすれば、四つのアプローチの優劣にこだわるよりは、相互補完的でかつ対抗的に利用し、多様で変動的な社会関係たる人種・エスニック関係に柔軟に迫る態度が必要だということになろう。結局、どのような社会的条件のときに、どのタイプのアプローチが有効か否か、実証的に検証し、社会的条件、環境とアプローチとの関連を明らかにすることが重要と思われる。

次に、オーストラリア研究に対する示唆を考えてみることにしたい。

(二) マルチカルチュラル・オーストラリア研究への示唆

オーストラリアが複合人種・エスニック社会である以上、前項でまとめた諸点が、そのまま応用されなければならないであろう。とくに、オーストラリアでも第二次世界大戦後の複合人種・エスニック社会化には目を見張るものがある。それ故に、オーストラリア研究において人種・エスニック関係研究が重要となることはいうまでもない。そこでいくつか、前項であげた点を踏えてオーストラリア社会研究上のポイントを二、三あげておくことにしたい。

まず第一に、やはりオーストラリアの人種・エスニック関係をみる時には、コンティンジェンシー・アプローチが必要となるということである。それは、白人（アングロ＝アイリッシュ系）とアボリジニ、白人とアジア人、アジア人同志やヨーロッパ系の人々の間など多様な人種・エスニック関係が存在し、ヨーロッパ系とアングロ・オーストラリア系の人々の関係と白人とアボリジニなどの関係を同じ観点から扱えるかどうか疑問であるからである。また、エスニック集団といってもその中の人々が一枚岩的に同じように反応し行動することも単純に仮定できないとすれば、エ

スニック集団の主体（リーダーシップ）の多様性にも注目しなければならないからである（McKay, 1982; McKay and Lewins, 1978; 梶田、一九八五a、b）。例えば、オーストラリアのイタリア系移民の反応は、F・ルーウィンスによれば、三類型に別けられるとする。すなわち、(イ)同化を志向する人、(ロ)イタリア人としてのアイデンティティを意識して社会に参加する多元主義志向の人、(ハ)全く社会的生活はエスニック・コミュニティの中に閉じ込もり、母国の出身地での生活に固執し、オーストラリア人というアイデンティティの稀薄な伝統志向の人、の三つである。これらの多様な反応は例外的なものではないのである。また、エスニック集団間関係も時とともに変化することも考慮する必要があり、主体状況と人種・エスニック関係と社会状況との関連の適応状況が注目されなければならないのである（Lewins, 1976: 126-128）。

しかし、以上の如く人種・エスニック関係の複雑さと動態を前提とした上でさらに注目すべき点をあげると、オーストラリアの人種・エスニック関係研究で、まずオーストラリアの移民・難民そして原住民に対する態度において文化相対主義的態度や異文化理解への関心と異文化コミュニケーションの手法を身につけて異質性への寛容度が高まっているか否かが検討すべき課題となろう。先に、人種・エスニック関係研究が、こうした文化、社会心理学的側面から焦点を移動し拡大していると指摘したが、それは、人々の寛容性も時々の状況に依存していると考えるからである。しかし、この動きは決して心理学的側面を軽視してよいということを意味してはいない。実際、原初的特性重視アプローチが示すようにエスニシティの特続的側面も簡単に否定できないし、また同化主義アプローチで強調する逸脱的な社会心理・パーソナリティ――それらは急激な社会変動という構造的要因と関連しているとはいえ――の問題も無視できないであろう。常に注意すべきポイントである。これが第二の点としてあげられる。

次に重要な点は、文化的分業ないしは集団競合アプローチが示すように、人種・エスニック関係は社会構造と関係しており、とくに経済的、政治的、社会的資源の不平等配分が人種・エスニック関係と重複する、あるいはその傾向

がみられるか否か考察することが重要な焦点となるであろう。つまり、構造的（状況的）な条件に注目し、いわゆるネガティブな構造的多元主義（あるいは制度的差別、institutional discrimination, Marger, 1985:55）の発生の有無、すなわち、文化的分業の発生状況が問題となるのである。これが注目すべき第三の点であるといえよう。

第二、第三の点を少しオーストラリアの文脈でいうと、前者は、いわゆる白豪主義的人種差別ないしは強制的同化から多元文化主義への対応の変化（社会のイデオロギー変化）をとくに問題視することを意味し（関根、一九八四、佐々木、一九八五）、後者は、脱工業化（ないしはポスト・サービス化）するオーストラリアの中で、移民や難民そして原住民が、職業、収入、威信、権力上どのような地位を占めてどのような文化的分業が形成されているか考察することを意味しよう（関根、一九八五）。

以上、人種・エスニック関係研究を通して三つの点が要約的に示され、オーストラリア研究上注目すべき点とされた。それらは、オーストラリアのダイナミックに変化する人種・エスニック状況を把握することと、それを土台にして人種・エスニック関係状況を評価する視点を提供するものといえよう。

しかし、最後にもう一点注目したい点があるのでつけ加えておきたい。それは、オーストラリア社会に独特なものとして存在するのではなく、高度に近代化された社会に共通の問題であるが、人種・エスニック問題は、普遍主義、業績志向社会の中の属性による差別や不平等などとそれにともなう紛争や改革・解放運動と連動している点である。それ故に、人種・エスニック問題も社会の近代化という文脈の中で、総合的な視野から考察される必要があるということである。それではどうして、属性的差別や不平等が存在するのであろうか、その点について簡単に示したい。

社会が近代化、合理化するとたしかに属性主義を否定し、業績および能力主義を中核とする普遍主義の社会が理想とされるようになるし、機会の平等や人種差別は法律的にも否定される。しかし現実には不平等、差別は存在し、本稿の焦点たる移民や少数民族を主体とする人種・エスニック集団の他にも女性、高年齢者、身体障害者、ホモ・セク

シュアル、宗教集団など属性的要因による差別を受けている人々は少なくない（Marger, 1985: 28-21）。法的には差別してはならないとしても結果的に差別されていることが多い。それは結局のところ、近代化の基調である能力および業績主義は、当然のことながら肉体的にも精神的（知能も含めて）にも有利な者を利するものであり、肉体的にも精神的にも不利なものは結果として差をつけられ、それ自体当然の結果とされてしまうからである。有利なものは一般的には男子で壮健な若者から中年であり、他の者は皆不利となる。女性や高齢者などがその結果差をつけられる。さらに当該社会の基本的言語、文化や宗教などから逸脱するものはハンディを負わざるを得ない。しかも一度業績主義のもとでついた差が次世代に継続されると、次世代の人々の差はますます拡大することになろう。属性上の有利さ不利さが業績にそのまま結果に反映されることを「アスクライブド・アチーブメント（ascrived achievement）あるいは属性に支えられた業績主義」であるとすれば、近代は属性上の差異を業績主義の名において拡大することを許す側面をもつといわざるを得ない（梶田、一九八一：七七―八四）。要するに、普遍主義によって機会の均等を保証したとしても、競争者の属性的差異に基づくハンディまで補正することは考えられていなかったといえよう。近代化の土台は、支配的文化・言語集団に属す壮年男性の男らしさ（masculinity）にあると極論することも可能であろう。

その結果次のようなことが生ずる。つまり「最近の傾向としていえることは、業績主義社会になって各種の不利益を被る人びとが自己防衛しようとした時、自己の機能なり業績主義的側面ではなく、自己の存在なり属性主義的側面に依拠して、ときとして業績主義それ自体に反対する拒否勢力になりやすいという」（梶田、一九八一：八三）ことである。女性解放運動、老人パワー、民族解放、独立あるいは自治運動もこうした結果でもあり、支配者集団の対応によっては紛争や暴力が生じよう。むろん、現代社会の不平等構造の再生産は多様な要因のもとに行われるわけだが、以上の議論は本稿の主題との関連において見逃がせない論点となるであろう。そして、これはオーストラリア社会においても例外ではないのである（Jupp, 1982: 18-22）。

すなわち、人種・エスニック関係研究は、一方で、コンティンジェンシー・アプローチを利用して現在のオーストラリア社会の多様な人種・エスニック関係の観察と改良方法の発見のみならず、他方で、属性主義の問題の一貫として人種・エスニック関係を捉え、そのことによってオーストラリア社会の近代性とともに、近代化の本質を問い直す作業を含意するといってよいと思う。これが第四のオーストラリアの人種・エスニック関係研究のポイントである。

(1) 筆者は、従来よりオーストラリア社会の人口動態に興味を抱き、その人口動態の変遷のもたらす社会的衝撃について考察してみたいと願っていた。そのためのステップとして、まず第二次世界大戦後のオーストラリアの移住政策や移民・難民問題に対するオーストラリア連邦政府の対応に注目し、戦後の白豪主義の終焉と多元文化主義社会への移行について論じた（関根、一九八四）。次に、オーストラリアの国内・国外の政治・経済状況の変動とともに、オーストラリア社会が複合人種・エスニック社会へと移行していく傾向が持続していく点を明らかにした（関根、一九八五a）。さらに、こうしたオーストラリア社会の人口構成の変動にともなってどのような問題が生じるか機会あるごとに考察してきた（関根、一九八五b、一九八六）。本稿はそれらの研究の延長上に位置し、人種・エスニック問題を理論的に考察しようとするものである。

(2) 後に示すように、近代化論に裏打ちされた同化主義アプローチは、近年批判の集中砲火を浴びているが、その批判の対象としてよくあげられるものは以下の通り。Parsons and Smelser (1956); Lipset and Rokkan (1967); Butler and Stokes (1969); Peacock and Kirsh (1970); Levy (1976); Deutsch (1969). 近代化論の主な要点をまとめる上で以下の文献も参照した。友枝（一九八一）、直井（一九八一）、富永（一九八五）、藪野（一九八四）。

(3) なお、同化主義アプローチがリベラルな期待を明確にしているのに対し、マルクス主義はラジカルな期待（radical expectancy）――階級的なものが分裂の中心となり、従来の部族・言語・宗教・民族の起源に基づく分裂へのこだわりがなくなり、階級もいずれ消滅するという期待（Glazer and Moynihan, 1975＝1984: 11-12）――を明確にしているが、いずれもエスニシティの消滅を期待としている点で性格は似ているといってよい。

(4) 主観的立場をとるからといって、単純にホロビッツを同化主義論者とはいえない。ホロビッツは同化についてのみ論じているのではなく、分化（differentiation）についても論じている。つまり、主観的アプローチに立つので、同化も分化も自由に論じられるのである。分化には分裂（differentiation）と増殖（proliferation）が考えられている（詳しくは、Horowitz, 1975＝1984: 152-7）。主観対客観については後に扱う。

(5) しかし、同化主義アプローチに立つものでも、「象徴的エスニシティ (symbolic ethnicity)」の存在を認めたり (Gans, 1979)、ヨーロッパ系のエスニック集団間の同化を認めつつも、非ヨーロッパ系集団との間の人種的同化の困難さを論ずるものもいる (Alba, 1985: 152-4)。ただ、この論者達も同化の進行そのものに疑いは抱いていないようである。

(6) この立場に立つ人々としては、次の人々があげられる。Shills (1957); Geertz (1963); Isaacs (1975); Keyes (1976); Isajiw (1974). なお「原初的」という概念を最初に使用したのはシルズであり、ギァーツがそれを展開したと一般にいわれている (Keyes, 1976: 211 ff)。

(7) エスニシティを主観的にみるか、客観的にみるかという点をめぐって議論が対立しているが、この点については以下を参照されたい。Burgess (1978: 115-7). 本文における客観ないしは主観主義アプローチの説明は同論文を参考にして筆者なりにまとめた。なお、この点に関して、主観—客観の単純比較図式のみではエスニシティ定義の分析には不十分だとして、綾部はA・アンダーソンとJ・フライダースの四つの視点を紹介している。それには、客観と主観的立場の折衷および三世代経過説が加えられている（綾部、一九八五：一一—二）。しかし、本稿では二分法に従った。

(8) イサジフによれば、一九四九年から七一年の間に発表された六五の人種・エスニック関係研究を調べたところ、立場は異にしているとしても、明確な定義を下している研究は全体の一三しかなく、他の五二の研究は定義すらしていなかったという。定義上の混乱と締めは原初的特性重視アプローチに個有のものではないということも注意しておきたい (Isajiw, 1974: 111)。

(9) エスニシティの定義を主観と客観の軸によって弁別し整理した議論としては以下のものがある。Burgess (1978: 266-8); van den Berghe (1979: 26-27). 本文での合理（政治・経済的利益指向）—非合理（感情性、アイデンティティ指向）に関する議論もバージェスの議論を土台としている。一般には、原初的特性重視アプローチが客観的、非合理的側面を重視するのに対し、後に扱う二つのアプローチは主観的、合理的側面を重視するとされるが、合理—非合理の分類における合理性概念の問題についてはバントンの議論も参照されたい。Banton (1985: 538-42). なお、歴史的には、客観的、非合理的側面が重視されていたが、バース (Barth, 1969) の研究の登場を契機として主観的、合理的側面が重視されるようになった。エスニシティ研究に大きな影響を与えたものとしてバースの研究は高く評価されている。

(10) この立場は、一般的にM・ヘクターによって代表される (Hechter, 1975)。しかし、それ以前にアメリカの黒人やスペイン語系を対象とした人種・エスニック関係研究において「国内植民地」概念が検討されている (Blauner, 1969; Moore, 1970)。この点は注意したいが、本稿では紙面の都合もあり省略した。これらの議論については、Marger (1985: 84-5) を参照された

い。なお、ヘクターの理論が、フランク（A. G. Frank）やウォーラーステイン（I. Wallerstein）の議論、すなわち従属理論や世界システム論などに親近性を示すことは多くの人々によって指摘されている（Leifer, 1981: 26;李、一九八五：二〇一）。

(11) M. Hechter and M. Levi (1979: 267–70) では、強力な単一国家で中央集権志向の強いフランスと、単一国家とはいえ分権的性格の強いイギリスを比較して、そこに生じるエスニック意識（ethnic conscious）の違いや集合行動の強弱を分析している。いずれにせよ、中央政府の対応によってエスニック集団の集合行動は大きく左右されるといってよい。なお、エスニック意識については M. Hechter (1978: 308) を参照。

(12) 文化的分業アプローチ支持者による論文は以下にまとめて収められている。Ethnic and Racial Relations 1979, 2 (3), Vermeulen and Boissevain (1984).

(13) ヘクターは、近年、イギリス、フランスでのエスニック政党の活動とそれに対する支持の鎮静化についても分析を行っている（Levi and Hechter, 1984）。

(14) Hechter (1978: 307–10) においては、階級とエスニシティの重複、あるいは競合・対立の関係が分析されており、アメリカ合衆国においては、白人系エスニック集団では階級が、非白人系エスニック集団ではエスニシティが重要な要素になっていることが示され、両者の関係の複雑さが示される。そこには合理的選択が働いていることが判明する。

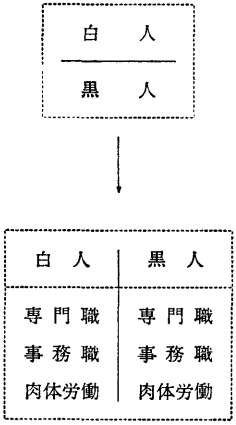
(15) 注12にあげた文献では以下の地域が扱われている。フランス（ブルターニュ）、カナダ（ケベック）、フィンランド、イタリア（南イタリア）、オーストリー＝ハンガリー帝国（歴史）、スコットランド、ウェールズ、南チロルとトランシルヴァニア、オーストリア、スイス、フランス（オクシタニー）、地中海、スペイン（カタロニア）。古い文化の存続が認められる地域が多いことが判明する。

(16) このアプローチは以下の文献で扱われている。Hannan (1979); Nagel and Olzak (1982); Ragin (1979); Olzak (1982); Nielsen (1980; 1985); Barth (1969).

(17) 資源動員論についてはとりあえず以下を参照されたい。長谷川（一九八五）、松本（一九八五）、Tilly (1978); Jenkins (1983). 塩原（一九八二）。

(18) エスニック集団競合アプローチは、脱工業社会あるいは後期資本主義社会の社会運動の一形態として生じたものであるともいえよう。脱工業社会、後期資本主義社会の社会運動については以下のものを参照されたい。山口（一九八五）、梶田（一九八五）、Touraine (1974, 1978).

(19) R・E・パークは、アメリカ合衆国における白人と黒人との間の人種関係を綿密に観察することによって、自身は同化主義アプローチに立つ身であるが、エスニック集団競合アプローチの同化＝エスニシティ顕在化のメカニズムの論点を先取りしていたといえよう。彼は、一九二八年論文で、奴隷制時代の白人・黒人関係と奴隷制以後の関係を比較し、前者には偏見と差別はあったが、後者にみられるような憎悪はなかったとしている（Park, 1928＝1986: 71-2, 75-76)。彼は同論文の中で、結局は職をめぐる争いが憎悪の原因であるとしているが、白人と黒人の関係の変化を下図のように示す（Park, 1928＝1986: 89)。



(20) 同化主義アプローチは、どちらかというと秩序（order）を志向し、文化的分業、集団競合アプローチの二つは、紛争（conflict）志向の理論といえるかもしれない。実際、後二者は社会運動論としての性格が殊に注目されている。社会をみる上で、二つのアプローチ（紛争―秩序）は当然のことながら補完的であるというべきであろう（Marger, 1985: 70)。

(21) コンティンジェンシー・アプローチは、条件適応、状況適合、変化適応アプローチと訳されることが多い。この型のアプローチは現代組織論の分野で、一九六〇、七〇年代に注目されたもので、五〇年代、六〇年代の組織論のジャングル時代を克服するために登場したものである。ここでは、人種・エスニック関係が、社会環境によって大きく規定される面に注目するとともに、研究者のアプローチも、唯一最善（one best way）の説明方法にこだわるよりは、対抗的相補的に柔軟にみる視点を持つことを意味している。現代組織論における問題については、関根（一九八〇：一二二―二三〇）および岸田（一九八五）を参照されたい。

引用・参照文献

Alba, Richard D. 1985 "The twilight of ethnicity among Americans of European ancestry: the cace of Italians." Ethnic and Racial Studies 8(1): 134-158.

Allardt, Erik 1981 "Changes in the Nature of Ethnicity: From the Primordial to the Organizational." Pp. 75-119 in Mustafa O. Attir, Burkart Holzner, and Zdenek Suda (eds.), Directions of Change: Modernization Theory, Research, and Realities. Boulder: Westview Press.

Anise, Ladun 1979 "Ethnicity and national integration in West Africa: some theoretical considerations." Pp. 314-44 in Raymond Hall. (ed.), Ethnic Autonomy — Comparative Dynamics. New York: Pergamon Press.

Bell, Daniel 1975 "Ethnicity and Social Change." Pp. 141-74 in N. Glaser and D. P. Moynihan (eds.). (内山秀夫訳一九八四：一九二一一二三五)。

Blauner, Robert 1969 "Internal Colonialism and Ghetto Revolt." Social Problems 16(4): 393-408.

Bonacich, Edna 1972 "A Theory of Ethnic Antagonism: The Split Labor Market." American Sociological Review 37(5): 547-59.

——— 1973 "A Theory of Middleman Minorities." American Sociological Review 38(5): 583-94.

Burges M. Elaine 1978 "The Resurgence of Ethnicity: myth or reality?" Ethnic and Racial Studies 1(3): 268-70.

Butler, D. and D. Stokes 1969 Political Change in Britain. New York: St. Martin's.

de Lepervanche, M. L. 1984 "Immigrants and Ethnic Groups." Pp. 170-228 in S. Encel, M. Berry, L. Bryson, M. de Lepervanche, M. Rowse and A. Moran, Australian Society: Introductory Essays. 4th edition. Melbourne: Longman Cheshire.

Deutsch, K. W. 1969 Nationalism and Its Alternatives. New York: Alfred A Knopf. (勝村茂・星野昭吉訳『ナショナリズムとその将来』勁草書房、一九七五)。

Gans, Herbert J. 1979 "Symbolic ethnicity: the future of ethnic groups and cultures in America." Ethnic and Racial Studies 2(1): 1-20.

Geertz, Clifford 1963 "The Integrative Revolution: Primordial Sentiments and Civil Politics in the New Stats." Pp. 105-57 in C. Geertz (ed.), Old Societies and New Societies. New York: Free Press.

Glaser, N. and D. P. Moynihan 1970 Beyond the Melting Pot, 2nd edition. Cambridge, Mass.: M. I. T. Press.

——— and D. P. Moynihan (eds.), Ethnicity: Theory and Experience. Cambridge, Mass.: Harvard University Press. (内山秀夫訳『民族とアイデンティティ』三嶺書房、一九八四)。

Gordon, Milton M. 1964 Assimilation in American Life: The Role of Race, Religion, and National Origins. New York: Oxford University Press.

——— 1975 "Toward a General Theory of Racial and Ethnic Group Relations." Pp. 84-110 in N. Glaser and D. P.

Moynihan (eds.). (内山秀夫訳　一九八四：一一五―一四八)。

――――― 1981 "Models of Pluralism: The New American Dilemma." Annals of The American Academy of Political and Social Science 454: 178-188.

Hannan, Michael T. 1979 "The Dynamics of Ethnic Boundaries in Modern State." Pp. 253-75 in J. W. Meyer and M. T. Hannan (eds.), National Development and the World System: Educational, Economic, and Political Change, 1950-1970. Chicago: University of Chicage Press.

長谷川公一　一九八五「社会運動の政治社会学――資源動員論の意義と課題」『思想』（七三七）：一一六―一五七。

Hechter, Michael 1973 "The Persistence of Regionalism in the British Isles, 1882-1966." American Journal of Sociology 79(2): 319-342.

――――― 1975 Internal Colonialism: The Celtic Fringe in British National Development, 1536-1966. London: Routledge & Kegan Paul.

――――― 1976 "Ethnicity and Industrialization: On the Proliferation of the Cultural Division of Labor." Ethnicity 3(3):214-24.

――――― 1978 "Group Formation and the Cultural Division of Labor." American Journal of Sociology 84(2): 293-318.

――――― 1983 "A Theory of Group Solidarity." Pp. 16-57 in M. Hechter (ed.), The Microfoundations of Macrosociology. Philadelphia: Temple University Press.

――――― and Margaret Levi, 1979 "The comparative analysis of ethnoregional movements." Ethnic and Racial Studies 2(3): 260-274.

Horowits, D. H. 1975 "Ethnic Identity." Pp. 111-140 in N. Glaser and D. P. Moynihan (eds.). (内山秀夫訳　一九八四：一四九―一九〇)。

星野智　一九八五「現代における危機と正統化――クラウス・オッフェの理論を中心に」『思想』（七三〇）：一一三八―一一五八。

Isaacs, Harold R. 1975a "Basic Group Identity: The Idols of the Tribe." Pp. 29-52 in N. Glaser and Moynihan (eds.). (内山秀夫訳　一九八四：四一―七三)。

――――― 1975b Idols of the Tribe, Group Identity and Political Change. New York: Harper & Row.

Isajiw, W. W. 1974 "Definitions of ethnicity." Ethnicity 1(2): 111-24.
石川一雄　一九八三「政治統合の規範的枠組――紛争の論理と統合の非論理――」『法学研究』五六（三）：二五一―八二）。
Jupp, James Party Politics: Australia 1966-81. Sydney: George Allen & Unwin.
梶田孝道　一九七六「対抗的相補性の社会学」『思想』（六二七）：三八―六一、（六二八）：一〇六―二〇。
――――一九八〇「業績主義社会のなかの属性主義」『社会学評論』三二（三）：七〇―八七。
――――一九八五a「新しい社会運動――A・トゥレーヌの問題提示をうけて」『思想』（七三〇）：二二一―二三七。
――――一九八五b「離脱者・媒介者・民族的闘士――エスニック紛争のなかの諸主体」『国際関係学研究』（一二）：一―一五。
岸田民樹　一九八五『経営組織と環境適応』三嶺書房。
Leifer, E. M. 1981 "Competing Models of Political Mobilization: The Role of Ethnic Ties." American Journal of Sociology 87(1): 23-47.
Keyes, Charles F. 1976 "Towards a New Formulation of the Concept of Ethnic Group." Ethnicity 3(3): 202-13.
Levi, Margaret and M. Hechter 1984 "The Rise and Decline of Ethnoregional Political Parties: Scottland, Wales and Brittany." Pp. 14-34 in H. Vermeulen and J. Boissevain (eds.).
Lewins, Frank 1976 "Ethnic Diversity Within Australian Catholicism: A Comparative and Theoretical Analysis." Australian and New Zealand Journal of Sociology 12(2): 126-135.
Lipset, S. M. and Stein Rokkan 1967 Party Systems and Voter Alignments. New York: Free Press.
Marger, Martin N. 1985 Race and Ethnic Relations: American and Global Perspectives. California: Wadsworth.
松本康　一九八五「相対的剥奪と社会運動」『思想』（七三七）：一〇二―一二三。
McRoberts, Kenneth 1979 "Internal colonialism: the case of Quebec." Ethnic and Racial Studies 2(3): 293-318.
Moore, Joan W. 1970 "Colonialism: The Case of Mexican-Americans." Social Problems 17(4): 463-72.
Nagel, Joane and Susan Olzak 1982 "Ethnic Mobilization in New and Old States: An Extension of the Competition Model." Social Problems 30(2): 127-143.
直井優　一九八一「社会変動の趨勢」富永健一・吉田民人編、三三―五四。

Nielsen, Francois 1980 "The Flemish Movement in Belgium after World War II: A Dynamic Analysis." American Sociological Review 45(1): 76-94.

——— 1985 "Toward a Theory of Ethnic Solidarity in Modern Societies." American Sociological Review 50(2): 133-149.

Olzak, Susan 1982 "Ethnic mobilization in Quebec." Ethnic and Racial Studies 5(3): 253-275.

Park, Robert E. 1928 "The bases of race prejudice." The Annals of the American Academy of Political and Science CXXXX (November): 11-20. (町村敬武・好井裕明編訳『実験室としての都市』御茶の水書房，一九八六：六三一八九)。

Parsons, Talcott 1975 "Some Theoretical Considerations on the Nature and Trends of Change of Ethnicity." Pp. 53-83 in N. Glaser and D. P. Moynihan (eds.). (内山秀夫訳一九八四：七五一一一三)。

Parsons, Talcott and Neil J. Smelser 1956 Economy and Scoiety. New York: Free Press. (富永健一訳『経済と社会』I・II，岩波書店，一九五八，一九五九)。

Ragin, Charles D. 1979 "Ethnic political mobilization: the Welsch case." American Sociological Review 44(4): 619-35.

Reece, Jack E. 1979 "Internal colonialism: the case of Brittany." Ethnic and Racial Studies 2(3): 275-292.

李光一 一九八五「エスニシティと現代社会——政治社会学アプローチの試み」『思想』（七三〇）：一九一一一一〇。

Sandberg, N. C. 1974 Ethnic Identity and Assimilation: The Polish - American Community. New York: Praeger.

関根政美 一九八〇「現代組織論の動向と人間仮説の変遷」『法学研究』五三（九）：一〇五一一三四。

——— 一九八四「戦後オーストラリアの大量移民と『白豪主義』の終焉」『法学研究』五七（一）：二七一五七，（二）：三一一五一。

——— 一九八五a「オーストラリア社会の多元文化化を促す諸要因に関する若干の考察」『法学研究』五八（九）：一一三二，（一〇）：三一一五一。

——— 一九八五b「移民問題がオーストラリアにあたえる影響」『オーストラリア研究シンポジウム報告書』豪日交流基金，三一一三九。

——— 一九八六「マルチカルチュラル・オーストラリアの諸問題」日豪調査委員会編『日豪関係研究報告』第七号。

Shils, Edward 1957 "Primordial, Personal, Sacred and Civil Ties: Some particular observations on the Relationships of Sociological Research and Theory." British Journal of Sociology VIII(2): 130-45.

塩原勉　一九七五「理論社会学における若干の基本問題」『社会学評論』二五（四）二五—四七。
——　一九八二「資源動員論の位置——運動の社会学の新動向をめぐって」『社会科学の方法』一五（一〇）：一—七。
Swidler, Ann 1986 "Culture in Action: Symbols and Strategies." American Sociological Review 51(2): 273-86.
Tilly, Charles 1978 From Mobilization to Revolution. Reading, Mass.: Addison-Wesley.（堀江湛監訳『政治変動論』芦書房、一九八四）。
富永健一　一九八五「『近代化理論』の今日的課題——非西洋・後発社会発展の理論を求めて」『思想』（七三〇）：一〇二—一二六。
富永健一・吉田民人編　一九八一『基礎社会学第V巻　社会変動』東洋経済新報社。
友枝敏雄　一九八一「近代化論」富永健一・吉田民人編、一五四—一七九。
van den Berghe, P. L. 1979 "The Present State of Comparative Race and Ethnic Studies." Pp. 23-36 in Jan Berting (ed.), Symposium on the Theory and Methods of International Comparative Research in the Social Sciences. Oxford: Pergamon Press.
—— 1978 Race and Racism: A Comparative Perspective. 2nd edition, New York: John Willy & Sons.
Vermeulen, Hans, and Jeremy Boissevain (eds.), 1984 Ethnic Challenge: The Politics of Ethnicity in Europe. Göttingen: edition herodot.
Vermeulen, Hans 1984 "Introduction." Pp. 7-13 in H. Vermeuren and J. Boissevain (eds.).
藪野裕三　一九八四『近代化論の方法——現代政治学と歴史認識』未来社。
山口節郎　一九八五「労働社会の危機と新しい社会運動」『思想』（七三七）：一五—三六。